

すべてをワクチンの開発に — 小山肆成 —

「iPS細胞さいぼうってすごいな。これから、病気で苦しんでいる人たちの多くが、助かるかもしれないね。」
土曜日の朝、父は新聞を読みながら母と話をしていた。iPS細胞とは、平成二十四年（二〇一二年）に日本人として二人目となるノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥やまなかしんやさんが開発したものだ。この研究が進めば、ダメージを受けた体の一部をiPS細胞からつくったものにとり替え、健康をとり戻すことができるようになるということだ。しかも副作用ふくさようを心配することもない。

「医学の進歩ってすごいわね。これからますます治なおらない病が減へっていくかもしれないわ。でも、昔は、今と比べて治くわすことができずに命を落としていった病気がたくさんあったわね。」

と、母が答えた。すると父は、

「そうだ、和歌山県出身の医師いしで、医学の進歩に大きな役割やくわりを果たした『北の青洲せいしゅう、南の蓬洲ほうしゅう』ってだれのことか知ってるかい。」

と、私に問いかけた。

「北の青洲って麻酔薬をつくった華岡青洲のことかな。南の蓬洲って……。」
と考えていると、父は、

「南の蓬洲とは小山肆成という人の別の呼び名だよ。和歌山県の医学界では華岡青洲と並び、高く評価されているんだ。彼は、天然痘という病気を治すワクチンを日本で最初につくったお医者さんだよ。天然痘は、高熱が出て全身が腫れ、重い場合には命を落とす病気で、今から三十年あまり前まで、世界中のあちこちでたびたび大流行しては人々に大変おそれられていたんだ。」

私は、この話を聞いて、小山肆成という医師について調べてみることにした。

小山肆成は、一八〇七年に白浜町の久木という山村に生まれ、若くして京都に出て医学の道に進んだ。



小山肆成の生家

ある日、肆成は『引痘略』という一冊の本をじっと見つめていた。『引痘略』は肆成の師匠から借りた中国の本で、三十年前にイギリスのジェンナーという人が天然痘の予防法を発見し、その方法について書かれた貴重なものだった。肆成は天然痘が日本で大昔から何度も流行し、その度に多くの人の命が奪われたことを知っていた。そこでこの文章を日本語に翻訳し、その予防法を学ぼうとしていた。しかし、その作業には大変な苦勞をとめない、なかなか思うように進まなかった。

一八四〇年ごろ、熊野地方で天然痘が大流行した。天然痘にかかった人は、周辺の人に伝染するのをさけるため、山奥に建てられた治療小屋に移り住み、そこでひたすら回復するか死を待つかしかなかった。

(一刻も早く仕上げなければ。)



この時から、肆成は食事の時間や寝る時間も惜しんで、『引痘略』にかじりつく毎日となり、医師としての収入がとだえた。貧困と闘いながらもひたすら翻訳を続けた。妻も、彼の研究を必死に支え続けた。

肆成のこうした努力が五年後に開花し、『引痘略』の翻訳本『引痘新法全書』が完成した。この本は、全国にまたたく間に広がった。それを読んだ日本各地の医師たちは、天然痘の予防に取り組もうとした。しかし、ここには大きな壁があった。

ジェンナーの開発した予防法では、まず天然痘の菌を牛の体に移して、その牛の血液などを使って「牛痘」と呼ばれるワクチンをつくる。そして、その牛痘を人の体に入れて、免疫をつくるというものだった。ところが、当時、外国から牛痘を買い付けることは、一人の医者では到底不可能なことであった。オランダ人が自国から長崎に持ちこんだこともあったが、長い船旅のため、牛痘はすっかり変質してしまっていた。日本で牛痘が手に入



引痘新法全書

らないために、この予防法は実際には使うことはできなかったのだ。

(牛痘ぎゅうととうさえあれば……。なんとかできないものか。)

日々その悩みなやをもち続けているうちに、肆成しせいは一つの決心をした。

(外国から入手できないのであれば、自分がつくれればいい。)

肆成は牛を買い、ジェンナーがやったように取り組んだ。しかし、どういわけかまったく成功せいこうしなかった。

(なぜなのか。どうすればいいのだ……。)

肆成の試行錯誤しこうさくごの日々は続いた。また、次から次へと牛の種類しゅるいを変かえて実験じっけんするためには、たくさんのお金がかかった。そのため、久木ひさぎでくらししていた肆成の兄は、田畑を売ってお金にかえ、肆成の研究を支えた。

(ここでくじけてはならない。なんとしても、牛痘を完成させなければ。)

一八四九年、肆成はついに牛痘をつくる実験に成功し、日本国産初こくさんはつの牛痘が完成した。この牛痘が、のちに多くの日本人々の命を救すくうこととなった。

肆成^{しせい}は、牛痘^{ぎゅうとう}の開発にすべてを注^そぎこみ、開発に成功した十三年後、京都^{きょうと}で生涯^{しょうがい}を終えた。

肆成が開発したこの牛痘は、世界の医学界で最も優^{すぐ}れたワクチンとして、現在^{げんざい}も高い評価を受けている。

調べていくうちに、私は、肆成の医師としての生き方に驚^{おろ}きと感動を覚^{おぼ}えた。そして、多くの苦難^{くなん}に直面する肆成の心を支えていたものは何だったのだろうか、彼に聞いてみたいと思った。

(参考文献)

- ・『日置川^{ひきがわ}町人物小伝蓬洲小山肆成』日置川町（現白浜町）教育委員会
- ・『日置川町誌 下巻』日置川町（現白浜町）

(写真提供)

- ・白浜町教育委員会